



町民文芸

只見短歌会 令和六年六月詠草

真夜さめて降り出す雨に気付きしは浅きねむりの歳をさびしむ
馬場 八智

久々に児童の姿見し朝は今日の一日は祝日の如し
目黒 富子

あの人にあのことなりと心しつ日常のまま時過ぎ行きし
関谷登美子

無防備にぬるぐるみ抱き寝入る息子のあどけなき顔しばし眺むる
立花 奏音

満開の芍薬の花朝露に濡れて春の陽浴びてきらめく
新国由紀子

病院で診察を待つ時長く微熱ある身はいたく疲れぬ
渡部ヨリ子

只見俳句会 六月定例会

忙しき一日終わりぬ蛙の音
魚の影子が追いかける新樹かな
一 恵

婿殿が肉焼きくれる花見かな
母の日やいま念願の薔薇の苗
真理子

天領の空にしばらく夏つばめ
老鷲や開拓村を一望し
恒 夫

花は葉に午後の日射しを散らす風
雨すだれ越しの山並ぶな若葉
礼

父の日や母のも箱の片隅に
葱植えて残った苗を味噌汁に
一 穂

わけなくも追いつ追われつ蝶々かな
川浴いに故郷指して青葉闇
修 一

転寝の頬をかすめる夏の風
梅雨晴れて幼児駆け出し微笑まし
信

乗り出して野球観戦夏近し
メールくる「まだまだ元気若葉して」
都

日高俊平太 指導